

研究ノート

東京芸術大学美術学部所蔵上野直昭資料について

大西 純子

一 はじめに

上野直昭（一八八二—一九七三）（挿図1）は、戦前から戦後にかけて日本美術史の研究者として大学において教育を行い、美術館や博物館の館長を務め、芸術大学では運営に携わった。具体的には京城帝国大学（以下、「京城帝大」とする）教授、一九三二年（昭和七）から三年間、九州帝国大学（以下、「九州帝大」とする）兼務、大阪市立美術館（以下「大阪市美」とする）館長、東京美術学校（以下「美校」とする）最後の校長、東京芸術大学（以下「芸大」とする）⁽¹⁾の初代学長となり、一時期東京国立博物館（以下「東博」とする）館長を兼務、退職後は愛知県立芸術大学（以下「愛知芸大」とする）学長を歴任した。このような経歴から見ると、戦中戦後の混乱した時代に日本で唯一の国立の芸術系大学および美術館博物館の運営の舵を取った人物としての側面に目が行きがちとなる。

挿図1 上野直昭肖像 東京芸術大学美術学部近現代美術史・大学史研究センター所蔵

ところで、とくに芸大楽理科および芸術学科の卒業生、現役学生にとっては、その生みの親として記憶したい人物である。戦後、従来の専門学校を新制四年制大学とするという方針は無論戦後の政府や文部省のそれに従ったのであるが、新たに大学となる意義として、彼は芸術にも教養の必要性を説いている。⁽²⁾新制大学となるにあたっての大学の組織およびカリキュラムなどを纏めた申請書は、美校および東京音楽学校（以下「音校」とする）の当時の校長小宮豊隆を始めとする教員達とも協議しながら、従来両校にあった師範科を廃して美術学部には芸術学科が音楽学部には楽理科が新設され、両学部の教員構成、カリキュラムその他は各学校の校長以下教員達によって決められた。しかしながら、そこには直昭自身が、京城帝国大学（以下「帝大」とする）で美学の教授であった大塚保治（一八六九—一九三二）、美校の元校長であった岡倉覚三（一八六三—一九一三）、岡倉の後継者と目されていた文部省の中川忠順（一八七三—一九二八）、帝大建築学科教授の関野貞（一八六八—一九三五）などから直接に教えを受け、その後欧州留学を経て「東洋学の研究拠点」を目指した京城帝大の教授となり、交換教授としてベルリン大学で講義を行い、同時に同大学「日本研究所」の日本側の所長を務めた上野直昭の、「学問の府」である「大学」というもののへの概念あるいは思いも影響したのではないであろうか。

上野直昭の専門分野は日本美術史、とくに絵巻物の研究であったが、彼の名は、研究者としてよりも今日ではむしろ芸術教育や芸術大学の運営面にすぐれた人物として記憶されているだろう。従来彼に関して発表された論文その他は、『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第三巻および同巻別巻『上野直昭日記』⁽⁴⁾、安松みゆき「資料紹介『ベルリンにおける日本古美術展覧会』」、同著「美術史家上野直昭とベルリンの『日本研究所』Japaninstitut」の活動をめぐって⁽⁵⁾、「上野直昭著『美学概論』」などが挙げられる。他に、本人の随筆『邂逅』⁽⁷⁾によって彼については知られていることも多いが、京城帝大時代の活動については詳しく知られていないため、今回、京城帝大時代の資料を含む本資料が寄贈されたことは意義深い。なお、『美学概論』の原稿は上野直昭が京城帝大で行った美学講義の日本語で書かれたノートもしくは原稿であるが、刊行されたそれは韓国語に翻訳されている。元の原稿は寄贈資料には含まれておらず、どのような体裁であったのか、また現在どこにあるのか確かめ

表 1 直昭資料中の書簡からみた上野直昭の人的ネットワーク

戦前・戦中	
一高・帝大	安倍能成、天野貞祐、伊東忠太、岩波茂雄、上野精一、大西克礼、鹿子木員信、九鬼周造、熊谷宣夫、黒板勝美、小泉信三、児島喜久雄、小塚新一郎、小林太市郎、小宮豊隆、瀧精一、竹内敏雄、田中豊蔵、田辺元、中川忠順、福井利吉郎、松本亦太郎、丸尾彰三郎、望月信成、森井健介、矢崎美盛、矢代幸雄、吉川逸治、渡邊一、和辻哲郎、その他多数
ベルリン	小塚新一郎、山田智三郎、(オットー・キュンメル)
京城帝大	麻生磯次、安倍能成、熊本正男、栗原一男、児島喜久雄、小林英夫、佐藤得二、高雄嘉四郎、田中豊蔵、矢崎美盛、渡邊一、高裕燮、中吉功、藤田亮策、その他
九州帝大(京城帝大と兼任 集中講義)	小野寺直助、矢崎美盛
大阪市立美術館館長	小林太市郎、望月信成
東京美術学校校長(昭和 27 年まで)	麻生磯次、伊藤廉、梅原龍三郎、熊本正男、小塚新一郎、田中喜作、田中豊蔵、中吉功、西田正秋、西本順、藤田亮策、松田権六、森井健介、矢代幸雄、安井曾太郎、安田靱彦、山下民蔵、吉川逸治、脇本十九郎(楽之軒)など、(東京音楽学校関係者 小倉末、小宮豊隆、遠山つや、など)
戦後	
東京芸術大学学長	伊藤廉、梅原龍三郎、熊本正男、小塚新一郎、中吉功、西田正秋、西本順、藤田亮策、松田権六、安井曾太郎、安田靱彦、吉川逸治、脇本十九郎など (音楽学部関係者 小倉好雄、遠山つや、など)
東京国立博物館館長	東京芸術大学学長と兼任
愛知県立芸術大学学長	小塚新一郎、佐野一彦、(大野) 高橋熙子=マクダモット、豊岡益人など
その他	
美術懇話会	岩波茂雄、上野精一、梅原龍三郎、大塚稔、児島喜久雄、小塚新一郎、坂崎坦、高見廉吉、田中喜作、田中耕太郎、田中豊蔵、田辺元、種田虎雄、長尾欽彌、原善一郎、福原信三、藤懸静也、細川護立、森井健介、矢代幸雄、安井曾太郎、脇本十九郎
東洋美術国際研究会	伊東忠太、上野精一、児島喜久雄、田中豊蔵、豊岡益人、長尾欽彌、福井利吉郎、藤懸静也、細川護立、丸尾彰三郎、矢代幸雄、山田智三郎、吉川逸治
美術研究所	児島喜久雄、田中喜作、田中豊蔵、豊岡益人、福井利吉郎、藤懸静也、丸尾彰三郎、望月信成、矢代幸雄、山田智三郎、吉川逸治、脇本十九郎、渡邊一
東京国立文化財研究所	田中豊蔵、福井利吉郎、矢代幸雄、吉川逸治
家族・親族	上野昭道(実父)・要(実母)・ひさ(妻・旧姓田中)・マリ子(長女・吉川逸治に嫁ぐ)・アキ(次女)・上野道(弟)・九鬼隆一・九鬼三郎・九鬼周造・九鬼縫子・田中きょう・田中元三郎・田中友一郎・橋口兼夫・橋口清・橋口半次郎・橋口八重子(妹・半次郎妻)・橋口康夫・三原繁吉・三原多恵子・三原政・吉川淳・坂井義三郎(犀水)その他多数

ることができなかった。⁽⁸⁾

本稿では、二〇一五年(平成二七)に芸大美術学部教育資料編纂室(以下「編纂室」とする)⁽⁹⁾に遺族より寄贈された上野直昭の資料に基づいて、彼が美術史学者となった契機から、その後しだいに学校運営に携わるようになっていく過程を中心に、上野直昭資料の意義について述べる。現在資料は、二〇二〇年(令和二)四月に旧編纂室の資料を母体として新たに設置された「東京芸術大学美術学部近現代美術史・大学史研究センター」⁽¹⁰⁾が保管するが、編纂室時代に寄贈されたものであるので、本稿においては編纂室の名称で述べていくこととする。なお、以下、研究対象、研究グループ関係者、資料整理関係者などについては敬称を省略し、それ以外の人達には敬称をつけて述べる。また、記述には基本的に西暦を用いるが初出時のみ和暦も付す。以下同年を記す場合には和暦は省略する。

二 上野直昭資料寄贈の経緯と資料の概略

二〇一四年(平成二六)秋、上野直昭の次女上野アキ(一九三二—二〇一四)が亡くなった。アキは東京文化財研究所(以下「東文研」とする)に長年研究員として勤め、定年後は名誉所員となった。翌二〇一五年春、遺族の吉川道子氏から、上野アキの研究資料を東文研に寄贈したいという申し出が同所の元司書でアキと親交の深かった中村節子を通じてあった。上野家には、アキ資料の他に、直昭の資料およびその妻で音校出身のヴァイオリニストであった上野ひさ(一八九三—一九九七)の資料があった。上野家資料を中村と一緒に見に行った山梨絵美子(当時東文研文化情報資料部長、その後二〇二二年／令和三 三月末日まで副所長)や元所員の米倉迪夫氏が、直昭資料とひさ資料は芸大に寄贈するのが妥当であろうという判断をしてくれたことにより芸大に寄贈されることになった。

アキは、定年退職後母の世話をしながら二人で国分寺の上野宅に暮らし、母亡き後もしばらくは国分寺に一人で暮らした。しかしその後アキは体調を崩し、亡くなる前の数年間は姪の道子氏と鎌倉の吉川家で暮らし、国分寺の家はアキの死後も暮らしていた時のままの状態であった。中村、山梨達が資料を見に行った時には、誰も住まなくなった家は老朽化が激しく、床を踏み抜いてしまうことがあったほど

で、そこに保存されていた膨大な量の資料はねずみの死骸やゴキブリの糞にまみれていたとのである。その場で、東文研から山梨、中村、芸大編纂室からは吉田千鶴子が、同大音楽学部大学史料室から橋本久美子が資料の大まかな分類と各寄贈先への分配に参加し、資料は纏めて芸大に送られ、二〇一五年七月、美術学部に上野直昭資料が、音楽学部の上野ひさ資料⁽¹²⁾が所蔵されることとなった。以下、上野直昭資料は、上野家の他の資料と区別するために直昭資料とする。

吉田は二〇一三年（平成二五）に芸大を定年退職し、その後は、芸大全校で二〇一一年（平成二三）から行われていたアーカイブプロジェクトの特別研究員として編纂室にそのまま残っていたが、寄贈の翌二〇一六年（平成二八）春にプロジェクトの完了および任期満了のため退職した。⁽¹⁴⁾ 資料は大まかな分類のみでほとんど整理されていないままの状態で残された。

三機関に寄贈された資料は相互に密接に関連するものも多かったため、二〇一六年初、東文研、芸大音楽学部、美術学部の各資料を連携して研究する研究会を結成し、科学研究費の申請を行った。研究会のメンバーは、美術学部は、編纂室から筆者（研究代表者）、研究分担者として芸術学科教授の片山まび、音楽学部からは大学史料室の橋本久美子、東文研からは塩谷純、山梨絵美子。連携研究者として同所の橋川英規。さらに、研究協力者として吉田千鶴子と中村節子が加わり合計八名であった。二〇一七年、二〇一八年（平成二九、三〇）の二回申請したが不採択であったために研究会は事実上解散となり、編纂室に寄贈された直昭資料は、途中芸大の一三〇周年記念展示の作業と資料を抱えての二回の部屋の引越⁽¹⁵⁾を行いながら、美術学部の資金により中村節子、大河内文恵、田代裕一郎を資料整理のために雇い入れて整理作業を行い、主として中村が目録を作成し、二〇二〇年三月にその作業を終了した。

直昭資料は、書簡類、日記類、受講した講義録、原稿・自筆諸資料類（調査ノート、意見書、式辞、講演の録音テープ）、公文書（辞令、履歴書その他）、印刷物などかなりの量で、上野家からの全資料の中で最も分量が多い。表2-4は全資料のうち自筆資料（調査記録、原稿、日記など）の抜粋であるが、ここでリストを示さなかった書簡は相当な数にのぼる。⁽¹⁷⁾ 妻ひさとの往復書簡以外は直昭宛に届いたものだけで

表2 上野直昭資料内容概略

直筆資料		
調査記録	21 件	明治 45・大正元年、大正 5 年、同 6 年、同 8 年、同 12 年、昭和 11 年、同 19 年、同 32 年、同 34 年、同 36 年、外、年代不詳
日記	45 件	明治 36 年～38 年、大正 15 年、昭和 5 年、昭和 12 年～46 年（途中無いものあり）
受講録	70 件	中川忠順 16 冊、大塚保治 12 冊、元良（勇次郎）9 冊、その他
講義録	1 件	
原稿	36 件	
その他	20 件	

書簡		
書簡（国内）	封 書	1865
	葉 書	261
書簡（海外）	封 書	103
	葉 書	8
	その他	1
書簡総計		2238

公文書など		
公文書類など	69 件	
朝鮮半島関係資料	46 件	
刊行物	90 件	
音楽関係	6 件	長唄、南葵音楽事業部その他
展覧会目録など	34 件	
その他	53 件	

表3 直昭直筆資料のうち抜粋(調査記録、講義録、原稿、その他)

資料名	題名	件数	和暦	西暦
調査記録	『二府四県』	1	明治45年・大正元年	1912
調査記録	「関西行記録」	1	大正5年12月	1916
調査記録	「関西行記録」続きか	1		
調査記録	「関西行記録」続きか	1		
調査記録	大正6年研究会などのノート	1	大正6年	1917
調査記録	大正8年古美術調査ノート	1	大正8年	1919
調査記録	タイトルなし/ドイツ語で	2		
調査記録	〔絵巻ノート〕	1		
調査記録	石塔調査カード	17枚		
調査記録	滞欧中の調査カード(ドイツ語)	多数		
調査記録	東京帝大時代ノート	17枚		
調査記録	「11月3日～10日」(法隆寺訪問)	1		
講義録	柏林大学における講義録(ドイツ語)	1	なし	1930-31
原稿	田中豊蔵氏遺稿集の序	1		
原稿	京城帝国大学法文学部教授会における帰朝報告『ドイツの日本研究所について』	1	昭和6年12月	1931
原稿	「博物館総長としての考え」	1		
原稿	「音楽学部問題」	1		
その他	国立博物館についての意見	1枚		

表4 上野直昭日記

和暦	西暦	月日	数量	備考(時期、又は場所など)
明治36年	1903	6月16日～8月30日	1	
		10月18日～12月30日		
		明治37年1月		
明治37年	1904～1905	4月1日～明治38年3月9日	1	
大正15年	1926	3月13日～10月15日	1	欧州留学時代
		11月14日～12月26日	1	フィレンツェ
昭和5年	1930	1月1日～1月30日	1	京城帝国大学教授
		3月9日～4月20日		
		4月24日～4月30日		
昭和12年	1937	1月1日～12月31日	1	京城帝国大学、2月大阪市立美術館館長へ
昭和13年	1938	1月1日～12月31日	1	
昭和14年	1939	1月1日～12月31日	1	
昭和15年～16年	1940～1941	1月1日～昭和16年12月31日	1	
昭和17年	1942	日付は飛び飛び	1	大阪市立美術館館長
昭和18年～19年	1943～1944	1月1日～昭和19年12月31日	1	大阪市立美術館館長⇒6月東京美術学校校長へ
昭和21年	1946	?	1	『上野直昭日記』(公用日記)昭和21年～28年 原本は東京芸術大学図書館所蔵
		10月18日?	1	
昭和22年	1947	9月12日?	1	
昭和23年	1948	9月16日?	1	
昭和24年	1949	4月18日～8月12日	1	東京美術学校⇒東京芸術大学へ 5月31日東京芸術大学設置 2月～4月国立博物館館長兼任
		1月1日～12月31日	1	東京美術学校・東京芸術大学併設時期
昭和26年	1951	?	1	
昭和27年	1952	1月1日～12月31日	1	3月31日東京美術学校閉校
昭和29年	1954	1月1日～12月31日	1	
		?	1	
昭和30年	1955	1月1日～9月29日	1	
?	?	1月20日～2月20日	1	
昭和36年	1961	1月1日～12月31日	1	12月 任期満了により東京芸術大学退職
昭和37年	1962	1月1日～12月31日	1	
昭和38年	1963	1月1日～12月31日	1	
昭和39年	1964	1月1日～12月31日	1	
昭和40年	1965	1月1日～12月31日	1	
昭和41年	1966	1月1日～	1	4月 愛知県立芸術大学学長被命
昭和42年	1967	?	1	
昭和42年～43年	1967～1968	12月28日～昭和43年1月26日	1	
昭和43年	1968	1月28日～9月7日	1	
昭和43年～44年	1968～1969	9月8日～昭和44年5月1日	1	
昭和44年	1969		1	
		5月2日～12月31日	1	
昭和45年	1970	1月1日～9月15日	1	
昭和45年～46年	1970～1971	9月16日～昭和46年4月17日	1	
昭和46年	1971		1	
		4月18日～12月21日	1	
昭和46年～47年	1971～1972	12月22日～昭和47年7月29日	1	昭和47年6月 愛知県立芸術大学辞任 48年4月逝去

相手への直昭の手紙の下書きなどはない。そのため何をどのようににしたのか、原因、経緯や結果などについては明確に知ることはできないが、これらの書簡から直昭がどのような交流ネットワーク(表1)を持っていたかがわかり、そのネットワークの中で、彼の研究や親交だけではなく、美術系の学問や人事に至る動きも見られる。しかしながら、封筒を失ったものや、親しい間柄でやりとりしたらしくフルネームのないもの、消印もなく書簡の年代が不詳のものも多い。そのため未整理となっている書簡もお残っており、またあまりにも個人的な内容で、美術界にほとんど関係がないと思われる書簡は遺族に返還したものも少なくない。¹⁸⁾

三 上野直昭の略歴

上野直昭は、一九〇八年(明治四二)帝大を卒業、同年同大学院に進学して心理学を専攻、一九一三年(大正二)に大学院を満期退学した。その間一九一一年(明治四四)に文科大学美学研究室勤務の副手となり、一九二〇年(大正九)には帝大教師を嘱託された。また、一九二四年(大正一三)から朝鮮総督府在外研究員として三年間欧州へ留学し、一九二六年(大正一五・昭和元)留学中に京城帝大教授となり美学美術史第一講座を担当した。一九三二年から三年間、九州帝大の教授を兼任し、美学美術史講座を担当、一九三五年(昭和一〇)、京城帝大の法文学部長となった(表5「年譜」参照)。

京城帝大在任中の一九三〇年(昭和五)から一年半ほど、交換教授としてベルリン大学で講義を行い、およびベルリン大学「日本研究所」の日本側の所長として滞在、また、一九三九年(昭和一四)に開催された「伯林日本古美術展覧会」に尽力した。戦況が悪化した一九四一年(昭和一六)、大阪市美の館長として帰国、一九四四年(昭和一九)に美校の校長に就任し、終戦を迎えた。戦後は新制四年制大学となった芸大の初代学長を務め、定年後は愛知芸大の創設に関わりその初代学長を務めた。美術史研究畑を歩んだ直昭であったが、現在彼の業績を振り返る時美術史学者としてよりも、むしろ美術教育や美術大学の運営面にすぐれていた人物として認識される所以である。また今では、美術分野における彼の出發が日本美術史、とくに絵巻研究であったことを思い出すことは少ないかもしれない。事実、京城帝大

から大阪市美に移った時に直昭自身が「戦争中大阪に在つて、大阪朝日新聞社の依頼に依り、飛鳥園の仏像写真の蒐集上代彫刻の概論を書いた。(中略)この外には学術的の著書はなく、論文も少く、学位もたぬ。学界に於ける地位などは頓着せず、一事務官になつて隠居仕事をした。」と書いている。²⁰⁾その後芸術大学学長となつてからは幾つもの著作を残したが、当時、大学運営の面で大きくあるいは広く活躍をしていくことになるとは予想もしなかったであろう。

四 日本美術史との出会い

直昭は一九〇四年(明治三七)に東京第一高等学校を卒業して、帝大法科大学校に入学した。法科の学問に興味を持てず、同大文科大学の講義を聴講するようになり、そこで大塚保治の美学講義に出会ったのだが、この出会いが直昭の人生を大きく変えていくことになった。²¹⁾翌年、文科大学に転科して心理学を専攻し、卒業後に美学研究室の副手として一〇年余を過ごした。大塚保治の講義を長く聴講し続け、「先生の講義は殆んど余すところなくきいた」とのちに回想しているが、それを示すように大塚保治の講義の受講ノートも多く、直昭資料中に一二冊残されている(表2)。大塚に関する思い出の中で、大塚が夏、鎌倉に避暑に来た際に、平子尚(鐸嶺)と彫刻家の新海竹太郎と三人で散歩していたのを目にした話がある。平子と新海の親交の深さと共に、あまり私的な場面での資料の残らない平子が大塚と親しく交流していた一コマが見えることは興味深い。²⁴⁾東文研に二〇一四年に寄贈された新海竹太郎資料の中に、平子鐸嶺の調査ノートがあったことも平子と新海の交友の深さを物語ると言えよう。²⁵⁾

また、日本美術に興味を持っていた直昭は、帝大工科大学の関野貞が同大文科大学で行った日本建築史を聴講した。この講義は建築史を主としていたが彫刻や絵画にまで亘る内容のものであった。そして「関野の講義に導かれて、殆んど毎年の春休みを奈良で送つた」²⁶⁾。そのような下地の上で、直昭は運命的な出会いをした。

一九一〇年(明治四三)、帝大に初めて美術史の講座ができた。その頃、文科大学に美学研究室が置かれ、直昭は美学の副手となった。元美学校長の岡倉覚三(号天心)が行った「泰東巧藝史」を聴き、岡倉から美術史学を本格的に勉強するよう

表 5 上野直昭年譜

大西純子編

和暦	西暦	月日	
明治15年	1882	11月11日	兵庫県に生まれる
明治41年	1908	7 月	東京帝国大学文科大学哲学科卒業、同大学院（心理学専攻）入学
明治43年	1910		岡倉覚三との知遇を得て、中川忠順について絵巻の研究をすることを勧められる（岡倉覚三特別講義「泰東巧藝史」）
明治44年	1911	9 月	東京帝国大学副手嘱託（美学研究室勤務）
明治45年・大正元年	1912	7 月～ 9 月	A.Keller と共に関西へ古美術研究旅行 ⇒『二府四県』
大正 2 年	1913	7 月	大学院満期退学
大正10年	1921	3 月	東京帝国大学文科大学副手辞職
大正13年	1924	10月	京城帝国大学予科講師嘱託（美学及び美術史研究の為ドイツ、イタリア、ギリシア、アメリカへ在留命令）
大正15年	1926	4 月	（留学中に）任京城帝国大学教授 法文学部教授 美学美術史講座担任
昭和 2 年	1927	3 月	帰朝
		6 月	京城帝国大学法文学部美学美術史第一講座担任
昭和 4 年	1929	12月	欧州各国へ出張命令
昭和 5 年	1930	2 月	京城出発
昭和 6 年	1931	7 月	帰任
昭和 7 年	1932	5 月	兼任九州帝国大学教授
昭和 9 年	1934	10月	東京帝国大学文学部講師嘱託
昭和10年	1935	2 月	補京城帝国大学法文学部長 朝鮮総督府博物館建設委員会委員被命
		5 月	朝鮮美術展覧会評議員を被命
		8 月	依願免京城帝国大学法文学部長
昭和13年	1938	4 月	陸叙高等官一等
		6 月	京城帝国大学評議員被命
昭和14年	1939	12月	李王家美術館評議員嘱託
昭和15年	1940	12月	国宝保存会委員被仰付
昭和16年	1941	1 月	依願免本官（京城帝国大学）
		2 月	大阪市立美術館長事務取扱嘱託
		3 月	大阪市立美術館長事務取扱嘱託を解く 大阪市理事を任ず、大阪市立美術館長を命ず
昭和19年	1944	5 月	大阪市立美術館長依願免官
			任東京美術学校校長
		6 月	補工芸技術講習所長 帝室博物館顧問被仰付
昭和21年	1946	4 月	東京美術学校長に補す、兼補工芸技術講習所長
		8 月	帝国学士院会員被仰付
昭和22年	1947		正倉院評議員会会員委嘱
		7 月	学術研究会議会員任命
昭和24年	1949	4 月	国立博物館館長兼東京美術学校校長
		5 月	東京芸術大学学長事務取扱
		7 月	国立博物館館長を免じ東京芸術大学学長に任ず
昭和25年	1950	12月	文化財専門審議会専門委員
昭和27年	1952	9 月	国立近代美術館評議員
昭和30年	1955	7 月	フランス美術館設置準備評議会委員（昭和33年 6 月まで）
昭和32年	1957	5 月	国際学士院連合第31回総会出席（ブリュッセル） 序でにスウェーデンを始めとして 7 カ国の音楽学校・美術学校の教育調査
昭和33年	1958	7 月	国立西洋美術館設置準備協議会委員
昭和34年	1959	3 月	国立劇場設立準備協議会委員
			国立西洋美術館評議員
		4 月	文化功労者に選ばれた。同年ドイツ連邦共和国から大十字功労賞贈呈された
昭和36年	1961	12月	任期満了により東京芸術大学退職
昭和37年	1962	10月	東京芸術大学名誉教授
昭和41年	1966	4 月	愛知県立芸術大学学長
昭和47年	1972	6 月	同辞任
昭和48年	1973	4 月	逝去

に薦められ、とくに中川忠順に就いて絵巻物を研究すると良いのではないかとアドヴァイスされた。⁽²⁷⁾直昭は岡倉の講義について「あんなに若い者の血を湧かせる講義を他にきいたことはない」と述べている。⁽²⁸⁾また、岡倉から薦められた中川忠順の講義も「すばらしく身のある講義であつた」⁽²⁹⁾。そして、中川の下で行った絵巻物の研究は「私の生涯の仕事の重要な部分をなす」ものであり、「此人〔中川〕に逢ひ、此人の講義をきいたことは、私の運命に影響した重大な意味をもつものと考へてゐる」と述べている。⁽³⁰⁾このように、岡倉、中川との出会いがもともと美学や日本美術に関心を持っていた直昭のそれから先を示し、あるいは学者としての道筋に大きな影響を与えた。とくに中川を師として尊敬し、「私は、岡倉―中川の線に沿ふ絵巻物研究を想起し、若し中川先生の蘊蓄を分けて貰へるならば、犬馬の労をとるのも厭はない気になり、若し中川先生に指導を受けられるならば、絵巻物を勉強して見たいと答へ」⁽³¹⁾一九一六年（大正五）には帝国学士院の研究費補助を申請して二人で共同研究を行った。⁽³²⁾この共同研究が具体的な修行時代であり、直昭の美術史学者としての出発点と考えられるがこの研究のちに中断された。

彼の随筆には、関野貞や中川忠順や瀧精一などの講義を聴いたことが述べられているが、関野と瀧の受講ノートは資料中には残らない。一九一六年以降、中川の講義を聴講した際の講義ノート一六冊（表2）も今回寄贈された資料の中に残っている。翻刻は直昭資料整理中に学習院大学の田中潤によって二冊に着手しただけでほとんどなされていない。⁽³³⁾しかし、直昭が残した中川忠順の講義ノートは、まとまった著作がほとんど残っていない中川の事績を検証する上においても大きな役割を果たすと思われる。後述するように、中川没後すぐに中川の遺稿集の刊行が計画されたようだが、この計画は残念ながら実現しなかった。

当時、直昭が日本美術史を学ぶ上での教科書または解説書としては、たとえば、早くは、岡倉が美校において行った「日本美術史講義」の筆記ノートを筆写したものを帝大生も借覧したという話が残っているが、それは直昭が一高時代に初めて奈良を訪れた一九〇二年（明治三五）よりも一〇年あまり昔のことであるし、一般に入手できたかどうか定かではない。帝大では直昭も聴講した建築史家の関野貞が行っていた建築史を中心とした日本美術史講義があつたが、いまだ帝大でも美術史

の講座はなかった。⁽³⁴⁾仏像写真は、小川一真、工藤利三郎、飛鳥園の小川晴暢などの図版集が明治末期から大正昭和にかけて出版されていたが、直昭の修行時代にはまだ多くはなかったであろう。一九〇一年（明治三四）になって、帝国博物館編（農商務省出版）の『稿本日本帝国美術略史』が刊行されたがなお満足なものとは言えなかった。しかしちょうど岡倉から美術史研究を薦められた一九一〇年、イギリスのロンドンにおいて、五月一日から一〇月二九日までの五ヶ月あまり日英博覧会が開催された。その時に出品された古美術品の目録の日本語版は同年七月、内務省宗教局編『特別保護建造物及国宝帖』（以下『国宝帖』とする）として審美書院より刊行された。この書は、美術の解説を岡倉、中川、平子が担当し、建築を伊東忠太と関野貞が担当した。⁽³⁵⁾林みちこ氏によれば、この目録は、岡倉が英語で講演し、それをラングドン・ウォーナーが筆記したものが元になっていると考えられ、さらに、

文体を分析した結果、英文は岡倉が編集、和文では平子が主導したのではないかとされる。⁽³⁷⁾おそらく、この本の全巻を通しての企画は岡倉が行ったと考えられ、『国宝帖』の美術史観には、この書を統括したと思われる岡倉のそれが反映されている可能性が高いだろう。以上から、直昭の日本美術史は、大塚保治やベルリン大学で影響を受けたエトムント・ヒルデブランドの美学を基にして、岡倉、中川、さらに関野などの学識と美術の見方からの影響が考えられる。⁽³⁹⁾

五 アドルフ・ケラーとの日本美術の勉強会―

『二府四県美術調査報告』（京都府、大阪府、兵庫県、滋賀県、奈良県、和歌山県） 自明治四十五年七月二十四日至大正元年九月二日（以下『二府四県』とする）

直昭は一高時代の一九〇二年に初めて奈良を訪れ、前述のように帝大では関野貞の日本美術史を含む日本建築史を毎年聴講して、ほとんど毎年の春休みには奈良を訪れていた。一九一二年（明治四五・大正元）の春、帝大の友人田村寛貞⁽⁴¹⁾を介して、ドイツ人のアドルフ・ケラー⁽⁴²⁾ [Adolf Keller] と知り合い、その年の夏にはケラーと共に関西旅行をした。このケラーとの出会いもまた、直昭が日本美術史を実際に研究していく上で大きな意味を持っている。随筆『邂逅』によれば、一九一二年の夏

にこのケラーと共に関西旅行をし、京都奈良大阪から高野山まで赴いて一ヶ月を共に過ごした。この夏（旅行中に明治天皇が崩御し、大正に改元）に近畿地方の古社寺、博物館、コレクターの収集品などを見て回った記録『二府四県』（挿図2―4）が残っており、筆者はその全翻刻を行った（表6参照）。それには、最初の部分に「今當時の覚書により国宝および同等の価値ありと認むるものの中、主要なるもののみを抜粋し、已往の研究の手にし得たるものを参照し、もつて報告となす」と、「既往の研究の手にし得たもの」を参照したと記しており、直昭自身の解釈も記されている。たとえば、挿図4の①には「（国宝帖による）」、同②には「（此点国宝帖記載と予の記憶と逆也尚研究すべし）」と記されているように、記録の所々に「国宝帖によれば」というメモを沢山残していることから、当時直昭が『国宝帖』を教科書のように参考にしていたことが窺える。『二府四県』は、内容的には学生の見学調査の際のメモの域を大きく出るものではないが、現地で現実に作例をよく観察してつぶさに記録するという、今なおつづく基本的な美術史研究の方法が研究の基礎であることを物語る。直昭は最初の論著『上代の彫刻』を一九四二年（昭和一七）に出版した。これは本稿「三 上野直昭の略歴」において述べた飛鳥園の仏像写真に解説を付けたもので、内容は九州帝大での講義の際に考えたことが元になっているというが、

挿図2 調査報告書『二府四県』表紙 東京芸術大学美術学部近現代美術史・大学史研究センター所蔵

挿図3 調査報告書『二府四県』旅程部分 東京芸術大学美術学部近現代美術史・大学史研究センター所蔵

若い時代に近畿地方の日本美術を実見して歩いたことがその基礎になっていたであろうことは想像に難くない。

また、ケラーと毎週一、二回会合してケラーの美術研究の手伝いをしたためにドイツ語が話せるようになった。直昭のドイツ語は、その後欧州留学やベルリン大学での講義および同大日本研究所の所長の仕事、伯林日本古美術展覧会への派遣などの際に非常に役に立った。資料中にケラー関係の封書四通、葉書四葉が遺存するが、直昭が『二府四県』を記した関西の古美術巡りを二人でしたあと、『二府四県』の「旅程」によれば直昭はそのまま帰京したように見えるが、ケラーは京都で電車を乗り換えて帰京し、直昭は神戸に行ったことが九月二日付けの手紙よりわかる(ケラー書簡1)。ケラーはその後一九一五年(大正四)(ケラー書簡2)(ケラー書簡3)および翌年には上海に行き、「ドイツ農業および工学学校」で教師をしている。「書生であり先生であるケラー」と葉書にあるのは、ドイツ語を直昭に教え、日本語を彼から習っていた彼らの関係が「教え教えられる関係」であったと共に、上海で教師をしていたためであろう(ケラー書簡4)。また、一九二四年にはドイツのグミュントというところから手紙が届いており(ケラー書簡5)、翌一九二五年にシュトゥットガルトで再会している。一九三〇年にはケラーは南ドイツの田舎町に引退していたが、一緒にライン下りをしたという。最後に会ったのはリムブルク・アン・デア・ライン [Limburg an der Lahn] であったがその後の消息はわからなくなったらしい。戦後、一九五四年(昭和二九)の明記のあるボズナーという人物からの書簡に(ケラー書簡6)、Philip Kellerの名が見える。これにはフィリップの名刺も同封されているが、ボズナーからの手紙は、スイスのルツェルンに住む、フィリップ・ケラーについて直昭が問い合わせたことへの返信か、またはボズナーからフィリップ・ケラーという人物を紹介しているのかは曖昧だが、フィリップはアドルフの遺族だったのではないかと推測される。直昭自身も述べているように、アドルフ・ケラーは、若き日の日本美術研究とドイツ語の習得とで、直昭にとって思い出深いと共に意義深い人物であった。

表 6 『二府四県美術調査報告（京都府、大阪府、兵庫県、滋賀県、奈良県、和歌山県）自明治四十五年七月二十四日至大正元年九月二日』
旅程の最後に、「今当時の覚書により国宝および同等の価値ありと認むるものの中、主要なるもののみを抜粋し、已往の研究の手にし得たるものを参照し、もって報告となす」とある。（下記の旅程リストは、直昭によって書かれたものを筆者が簡略化したもの）

明治45年	
7月24日	午後新橋発
25日	午前京都着 午後京都発神戸着
26日	午後御影に行き 家宝鑑賞の打ち合わせのため村山龍平氏訪問不在
27日	村山氏に電話にて都合を聞く
28日	午前村山氏訪問 家宝掛幅24点見る
29日	午前神戸発 午後姫路着 旧城内天守見る
30日	午前姫路発 網干に行き斑鳩寺を訪う 建物および掛幅を見る
大正元年	
7月31日	京都へ。博物館へ。大喪のため8月4日まで閉館
8月1日	亀岡（末吉）京都府技師訪問。太秦広隆寺、仁和寺へ。建物、宝物見る
2日	本願寺 銀閣寺など
3日	東山方面、栗田青蓮院、知恩院、豊国神社、蓮華王院、清水寺など
4日	北野神社 金閣寺
5日	博物館にて彫刻の研究。午後本願寺、六波羅蜜寺、愛宕念仏寺、建仁寺等の建物
6日	本願寺、午後博物館にて彫刻研究。六角堂
7日	博物館にて絵画25点
8日	博物館にて絵画21点
9日	大阪市上野理一郎訪問、絵画17点展観、夜京都へ戻る
10日	博物館絵画15点研究
11日	西村総左衛門氏邸にて絵画 2 点を見、午後東寺（教王護国寺）に諸建築彫刻等を見、観智院にて什宝を見る
12日	京都博物館へ行き、絵画20点研究
13日	同じく博物館に行き絵画16点
14-15日	滋賀県比叡山および石山寺へ建築物研究
16日	午前博物館に行き絵画 8 点、繡曼荼羅 1 その他を研究し、午後八坂神社楼門を見る
17日	午前京都発、午後奈良県畝傍駅着、橿原神宮、久米寺、神武天皇御陵を見る
18日	午前畝傍駅発、五条駅下車、栄山寺八角堂研究。午後五条駅乗車と歌山県高野口駅下車、高野山に着 恵光院に宿す
19日	午前金剛三昧院にて多宝塔及襖絵研究、午後金剛峯寺襖絵、その大会堂内諸仏、不動堂及堂内彫刻、愛染堂内、金堂内諸仏研究
20日	午前遍照光院、親王院宝什拝殿、午後金剛峯寺宝蔵内什宝、安養院に有志八幡講の絵画 3 点、金剛三昧院多宝塔内仏像、同院彫刻研究
21日	清浄心院で什宝、正智院、無量寿院、宝珠院に行く
22日	普門院、南院、宝亀院、西南院など訪問
25日	午前高野山発夕刻奈良着
26日	奈良帝国博物館にて彫刻陳列品直覧。絵画数点研究
27日	法隆寺金堂、宝蔵、夢殿、伝法堂、上御堂、西円堂などの内部秘仏像および中宮寺本尊如意輪観音および天寿国曼荼羅拝観
28日	奈良博物館にて絵画22点研究
29日	奈良発 夕刻兵庫県神戸着
30-31日	休養
9月1日	午前神戸発、午後宇治着。平等院鳳凰堂の内外および定朝作の阿弥陀像研究。宇治神社および宇治上神社の建築を見る。夕刻京都着
2日	南禅寺小方丈および方丈拝観。下鴨神社外観を見て、同夜帰京。

この旅程に続いて、各日の調査の詳細な報告が述べられている

六 資料を用いて研究し得る可能性のある分野

直昭資料がどのような研究に資することができるかについてであるが、以下の(一)から(四)のようなものの参考とすることができらるだろう。

(一) 戦前の京城における美学美術史教育、美術行政と人的ネットワーク

○直昭の京城帝大における弟子で、韓国人美術研究者の草分けである高裕燮(一九〇五—一九四四)の研究から、当時の京城における芸術教育を探ることができ、可能性がある。これについては、すでに、田代裕一郎が、直昭資料中の「高裕燮」に関連する資料を用いて、高裕燮の美術史観について言及する発表を行った。⁽⁴³⁾ 京城帝大における直昭については、田代が『美術研究』次号に掲載する予定である。

○直昭は京城帝大における同僚の田中豊蔵(一八八一—一九四八)らとともに朝鮮美術展覧会評議員、李王家美術館評議員を務めるなど、美術行政に関わっていたので、当時の美術行政についての検証および考察についての手がかりとなるだろう。田中豊蔵は、戦後、美術研究所の所長兼東京都美術館長を務めたが一九四八年四月に肺炎のため逝去した。

○直昭は、安倍能成、浅川伯教らと朝鮮の趣味を語る会を催すなど、当時の京城を中心とする美術ネットワークの中心にいた重要な人物であった。彼を中心とする京城における人的ネットワークによって、当時の京城における美術研究、美術行政、美術そのものへの関心などを探ることができ、可能性がある。美術、美術史におけるネットワークを明らかにし、多角的に日本統治期の文化財政を捉え直す一助となると考えられる。

(二) 上野直昭と日本美術

前述のように、直昭は帝大の副手時代に岡倉寛三と出会い、中川忠順に師事して絵巻研究を志した。しかし今まで、日本美術史研究者としての直昭については、あまり注意が払われてきたとは言えない。彼の美術史研究者としての側面をさぐることによって、同時代の美術史学形成過程の一端を検証する手がかりとなるだろう。

(三) 東京美術学校から東京芸術大学へ

すでに『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第三卷および同巻別巻「上野直昭日記」によって当時の概略は知られているが、資料中には、直昭を美校校長に推薦した人物からの書簡が遺存する。

◎大塚稔および本田弘人の書簡

『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第三卷によれば、一九四四年、美校を改革する必要性に迫られた時、文部省の主導によって当時の校長澤田源一は更迭され、多くの教員が辞職した。代わって、上野直昭が校長となり、梅原龍三郎、安井曾太郎など美校出身ではない教員が任用された。矢代や田中豊蔵、豊蔵の弟の田中喜作など美校に関連する友人がいたとはいえ、何故ここで急に直昭に白羽の矢が当たったのか、それには横山大観の推薦があったためとされており、その大観に推薦したのは大塚巧藝社の創業者である大塚稔とされている。直昭資料中の書簡に大塚稔からの手紙が遺されており、それによれば、大塚が横山から「東京美術学校校長にだれが良いか」と尋ねられて、直昭を推薦したとある(和文書簡1)。「同百年史」当該巻において、執筆編集の吉田千鶴子は、以下のように述べている。「いかに相談相手とはいえ、大塚稔一人の意見に従って大観が上野を推薦したなどというのも疑問である」⁽⁴⁵⁾。確かに、吉田が書いたように、すでに筋道は決まっていた可能性があるだろうが、この手紙によって実際に横山大観が大塚に意見を求めたこと、大塚が直昭を推薦したこと、次の文部省の本田弘人⁽⁴⁶⁾の手紙によって文部省から直昭に連絡があったことが確認できた(和文書簡2)。本田の書簡から当時大阪にいた直昭は大塚の手紙の後、上京して文部省の役人達と会って話を進めたと推測される。また、本田は、直昭が京城帝大から大阪市美の館長となる際にも話を進めた可能性が、本田からの書簡によって推測される(和文書簡3)。さらに興味深いことには、直昭が校長となる直前の一九四四年四月(または三月、不詳)の本田からの書簡によって、美校改革後に教員に加わった日本画の安田靉彦(新三郎)、小林古径、洋画の梅原龍三郎、安井曾太郎との話合いにも本田が関わっていたことがわかる。『邂逅』を元に吉田も前述の文章の中に書いているが、直昭が安井曾太郎その他を美校教授に迎えたかったが、安井などとあまり親しくなかったため、児島喜久雄の

アドヴァイスで横山大観に説得して貰おうとし、それにもかかわらず、彼らが当初あまり乗り気ではなかったことも本田の書簡(和文書簡4)によりわかる。⁽⁴⁸⁾

(四) 周辺美術家・美術史家・音楽家などとの交流

直昭をめぐる人的ネットワークから、当時の美術行政および美術界の様相を探る。

たとえば、前述した中川の遺稿集刊行計画について、一九二八年(昭和三)、文部省の丸尾彰三郎から中川忠順が亡くなったため、その遺稿集を編む件で京城帝大に居た直昭に來た手紙がある。遺稿集編纂の色々なアイデアや具体的な資金のことまで書かれていたにもかかわらず、何故かこの遺稿集は編まれなかった。また、同じ頃帝大の友人の福井利吉郎からは、中川亡き後の文部省の人事の件(藤懸静也に決まったこと)などを京城帝大の直昭に知らせてきている。未確認であるが、安田鞞彦(新三郎)からの書簡には、あるいは前述の安田、小林、安井などが美校教授となる件について述べられているものがある可能性がある。

七 書簡に見る直昭と矢代幸雄、小塚新一郎・吉川逸治たちとの関係

本節は、前節六の(四)の一部であるが、少し長く述べるために一節を設けることとした。

直昭は、元美校教授での中に帝国美術院付属美術研究所(以下「美術研究所」)所長となった矢代幸雄⁽⁴⁹⁾との関係が深く、矢代からの書簡は、封書七一通、および葉書一七葉と最も多い。一高、帝大の同窓とはいえ年齢は八歳の差がある。彼らがどのようにして親しくなったのか興味を引かれるが、矢代は英文科を卒業して大学院では美学に籍を置き、当時美学研究室の副手だった直昭とそこで出会った。矢代の言によれば「上野君はその頃からおやじのような気をする親しむべき人物であったから、私はすっかり馴染んで、始終そこ「美学研究室」に入りびたり、学習院から同研究室に入った児島喜久雄にも紹介された。⁽⁵⁰⁾その後、長らく『美術新報』の編集長を務めた坂井犀水が辞めたので、矢代は児島、直昭と共に数ヶ月だけ『美術新報』

の編集をした。⁽⁵¹⁾書簡から見ると矢代は直昭に対して深い信頼と尊敬を寄せており、矢代の書簡には研究に関することや人事、その他趣味から仕事にまでおよぶ広い範囲で忌憚なく多くのことが書かれている。彼らの求める「研究世界」の片鱗が窺えることも推測され、矢代からの書簡を詳しく見ることは、矢代という美術史家を研究する上において意義があるだろう。また、直昭自身は籍を置いたことはないが、現在の東文研の前身である美術研究所に関する話題も散見され、研究所に関する矢代の考えなども窺える可能性がある(和文書簡5、6)。

矢代はイタリア美術史を研究し、一九二五年にロンドンで『サンドロ・ボッチチェ⁽⁵²⁾』を刊行したが、のちに東洋美術史の研究にも関わるようになった。矢代は、師のイタリア美術史研究者のバーナード・ベレンソン(一八六五—一九五九)を始め、スウェーデンの東洋美術史研究者のオズワルド・シレン(一八七九—一九六六)やアメリカの美術コレクターであるチャールズ・ラング・フリア(一八五四—一九一九)、大英博物館のローレンス・ビニヨン(一八六九—一九四三)、ベルリンの東アジア美術館初代館長のオットー・キュンメル(一八七四—一九五二)など海外の美術関係者や研究者達との交友も多く、⁽⁵³⁾国際的に活躍した矢代との交流は、自身も京城やベルリンにおいて国際的な活動をした直昭にとって学窓の後輩であるばかりではない繋がりが窺える。

しかし、一高を中退して書店を営んだ岩波茂雄(一八八一—一九四六)や直昭が美校校長であった頃、隣の音校の校長であった小宮豊隆(一八八四—一九六六)など、友人について直昭の随筆に多く見られるが、矢代についてはあまり多くを語っていない。また矢代の多くの著作の中にも直昭の名は、おそらくあまりにも日常的に親しかったためなのかさほど多くはない。往復書簡ではないので、直昭がどのような手紙を矢代に書いていたのかはわからないが、直昭資料中の矢代の手紙から見ると、矢代は直昭に対して驚くほど素直で甘えているとさえ見える。さらに、彼らの関係の上に小塚新一郎と吉川逸治兄弟が加わりかなり濃密ともいえる関係が築かれていくことになる(和文書簡7、8)。

小塚はのちに直昭退職後芸大の第二代目学長となり、さらに愛知芸大においても直昭の次の学長に就任している。その弟の吉川逸治は、矢代の教え子でありフラン

スに留学した。戦後、兄の小塚が直昭の軌跡を辿るかのように芸大学長、愛知芸大学長となったのと同様に、吉川は矢代の軌跡を辿るかのように、芸大教授となりその後一旦東大教授となったが、定年後は矢代が退職した後に大和文華館館長となっている。さらに、吉川逸治は直昭の長女マリ子と結婚して、直昭の義理の息子になった。このように濃密な関係がこの四人の間に築かれていくことになる。

直昭と小塚の関係は、和文書簡5、7に見るように、一九二六年ベルリンにいる直昭の元に届いた書簡において、矢代が小塚を紹介するところから始まる。矢代が大森の自宅からベルリンの直昭に送ったこの手紙によると、矢代は、旧知の小塚新一郎がドイツに留学するので、ドイツに到着してから当面の世話を直昭に依頼している。矢代の手紙に同封されていた小塚の手紙によれば、直昭がベルリンにいたので矢代に紹介を頼んだようである。その後小塚はドイツで教育学と哲学を学び、博士号を取得して帰国後は美校の講師から教授へと進んでいく。一九三七年（昭和一二）、美校がドイツ人哲学者のシュプランガーを招聘して講演をした際小塚は通訳と翻訳を行ったが、その後シュプランガーの書の翻訳出版に関する書簡が資料中に遺存する。

矢代が最初に小塚を直昭に紹介した手紙には、小塚を「東京女子大に居た小塚しげ子」の兄と書いているが、直昭は京城に行く前、東京女子大において教鞭を執っていた。その時の教え子であろうか。矢代から直昭へ「しげ子の母は私にとって姉のようなもの」という主旨のメモが残っている名刺が送られているが、小塚しげ子が東京女子大にいたことが直昭に直接的な関係があるかどうかは今の所わからない。

八 おわりに

上野直昭は、帝大で大塚保治の美学、関野貞の日本美術史、美術史家の岡倉天心―中川忠順、ベルリン大学で美学者ヒルデブランドなどの出会いなどを通じて日本美術史研究者となった。残念なことに直昭本人の絵巻その他の日本美術研究が今日高い評価を受けているというわけではないが、彼が残した大塚保治や中川忠順などの多くの受講ノートからは、大塚や中川の研究を知ることができるばかりか、当時の美学や美術史の学問の状況を推察することができるだろう。芸術大学の運営や

教育者としての面を取り上げられがちな直昭の学者としての業績の一つと捉えても良いのではないだろうか。

また、本資料により直昭の周りにめぐらされた人的ネットワークが明らかとなり、戦前から戦後にかけての日本美術史学および美術行政の一側面を検証する手がかりを与えてくれると思われる、本資料が様々な分野に資する可能性が窺える。こうした点から、京城帝大、美校、東京芸大といった校史に果たした直昭の役割を検証し得るのみならず、戦前から戦後の美術史学や美術行政などを含む美術界の様相を研究する上で参考資料としての価値は高いと言えよう。

註

(1) 現在東京芸術大学は「東京藝術大学」と称しているが、一九四九年上野直昭が学長になった際に文部省に提出された大学の名称は「東京芸術大学」であり、公文書では今なお「東京芸術大学」である。また、著者も編集執筆を担当した『東京芸術大学百年史』（全二巻）のタイトルも「東京芸術大学百年史」であるため、本稿では「東京芸術大学」で進める。

(2) 「東京芸術大学開学式学長式辞」『東京芸術大学百年史 大学篇』ぎょうせい 平成二〇〇三年三月 一三四―一三六頁。特に一三五頁上段から下段にかけて「従来大学といへば学術の研究が主であつて藝術方面は顧みられず僅かにこの二校が専門学校として認められていたに過ぎないのであります。（中略）吾国文化運動を指導すべき人物の養成」を旨とし、「専門学校では主として技術の修練を中心として教育されましたが、大学に於ては一般の教養を高めつゝ、人間性の基礎の上に技術の纏奥が極められる」と述べている。また、「芸術学科の発足」（『東京芸術大学百年史 美術学部篇』ぎょうせい 平成二〇〇三年一月 二七―四一頁）においても直昭が「実技・理論兼備の人材を育成するための同科の設置に情熱を注ぎ、設置が実現したことに大変誇りを持っていたといわれる」としている。

(3) 「東京芸術大学設置認可申請書」関係書類 前掲註2『大学篇』五一―二三頁

(4) 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第三巻 九八―一九八四頁、同巻別巻上野直昭「上野直昭日記」両著とも ぎょうせい 一九九七年三月

(5) 安松みゆき「資料紹介 ベルリンにおける日本古美術展覧会」『美術史』第一四七号 一九九九年一〇月 一二四―一三七頁、「一九三九年の伯林日本古美術展覧会と東洋美術協会・伯林日本古美術展覧会の背景についての一考察」（発表要旨）『別

- 府大学アジア歴史文化研究所報』一八二〇〇〇年三月 九一―九二、「美術史家上野直昭とベルリンの『日本研究所』[Japaninstitut]の活動をめぐって」『別府大学紀要』第四三号 二〇〇一年二月 一一―一二六頁
- (6) 우에노나오테루『미학개론』서울대학교출판부 二〇一三年(上野直昭『美学概論』ソウル大学校出版部 二〇一三年)
- (7) 上野直昭『邂逅』岩波書店 昭和四四年(一九六九) 三月
- (8) 二〇〇六年七月二日、京都国立近代美術館において開かれたアジア芸術学会において、神林恒道氏が「上野直昭美学講義ノートめぐって」という題目の講演を行った。これは、アジア芸術学会が二〇〇六年度から四年間、科学研究費基盤研究(B)として交付された研究課題(課題番号 一八三二〇〇三五)「アジア的美意識とは何か」(研究代表者 神林恒道)の一環であった。そのため、神林氏に電話で元の原稿についてお尋ねしたが、すぐに思い出せないで手紙で問い合わせるようにとのお返事であったため、手紙を送ったが返事はなかった。元の原稿は現在も所在を確認中である
- (9) 東京芸術大学美術学部教育資料編纂室(以下「編纂室」とする)は、一九六四年、美術学部において「紀要」編集を主に東京美術学校・東京芸術大学美術学部の沿革史編纂をも行うことを目的として、学内措置で芸術学科内に設置された。その後、東京芸術大学百周年記念事業の一環として百年史を編纂するにあたり紀要編集とは仕事内容が分離されたが、一九九七年までは同じ室で紀要および百年史編纂が行われていた。一九九七年、紀要編集とは部屋も分離され、二〇〇三年に百年史の全刊行を完了した。その後も編纂室は存続して美術学部の沿革に関する史料の調査、蒐集、整理、研究を続けていたが二〇一〇年三月末日、五六年間の歴史を閉じた
- (10) 二〇二〇年四月一日、編纂室の資料を母体とした「東京芸術大学美術学部近現代美術史・大学史研究センター」(Geidai Archives Center of Modern Art 通称 GACMA)として設置され、大学の組織に正式に組み入れられた。したがって、現在資料は「GACMA」が保管しているが、本稿では編纂室の名称を用いる
- (11) 吉川道子氏は、西洋美術史家吉川逸治の長女。吉川逸治(一九〇八―二〇〇二)は、上野直昭の長女マリ子の夫。東京美術学校講師、東京芸術大学教授、東京大学教授、大和文華館館長など歴任。東京美術学校教授、東京芸術大学教授、東京芸術大学学長、愛知県立芸術大学学長を歴任した小塚新一郎(一九〇三―一九七七)は兄。中国文学者で京都大学教授であった吉川幸次郎(一九〇四―一九八〇)は従兄
- (12) 橋本久美子「田中ひさ資料紹介 ベートーヴェンに勤しんだ東京音楽学校の先輩達①」東京芸術大学音楽学部演奏芸術センター エッセイ「つながるベートーヴェン」第一三回 二〇二〇年十一月二三日 upload <https://www.pac.geidai.ac.jp/post/essay12>
- (13) アーカイブプロジェクトは、音楽学部の大学史料室および美術学部の編纂室のみならず、二〇一一年―二〇一六年の五年間にわたる芸大全体のプロジェクトであり、芸術情報センター、美術館、図書館を始め多くの部署が参加して様々なメンバーによって構成されていた。したがって、編纂室に勤務していた筆者も当時勤務していた坂口英伸も特別研究員を兼任した
- (14) 二〇一八年六月、吉田千鶴子急逝
- (15) 二〇一七年一〇月七日―二二日、東京芸術大学の二三〇周年を記念する一連の行事の一つとして開かれた茶会(本席は正木記念館)の待合として使用された陳列館二階において、第五代東京美術学校校長正木直彦および彼を顕彰して建てられた正木記念館に関する資料展示「それゆえに藝大茶会記念展示」(企画 美術学部教育資料編纂室 展示・大西純子・浅井ふたば 年譜・解説・大西純子 空間デザイン・橋本和幸/本学デザイン科教授「挟み込み記事」編集責任+監修松下計「GEIDAI CHAKAI 2017 藝大茶会 それゆえに」藝大茶会実行委員会/東京芸術大学美術学部 二〇一九年三月)を行った
- (16) 上野資料の寄贈があった二〇一五年七月に、旧芸術資料館の老朽化および現在の図書館B棟への建て替えのために、旧芸術資料館二階(元の平櫛田中記念室)から大学会館二階の大集会所に寄贈された資料もろともに移り、その後二〇一八年七月に再度正木記念館一階に移動した。膨大な資料の移動およびその後の整理をしながら寄贈資料の整理を行った。現在、編纂室の居室だった正木記念館一階はGACMAが継承している
- (17) 書簡については数が多く、また消印の部分が切り取られていて不明なものが多かった。従来筆者が整理する際には、書簡は氏名の五十音順に配列し、さらに各人の書簡を年月日順に配列し、可能であれば各手紙の内容を簡単に備考に記しておくが、直昭資料については時間的な制約が多く、今回はそのような整理をすることは不可能であったために、書簡の分類および目録は従来の形式と異なったものとなった。将来、GACMAのスタッフによってさらなる整備がなされることと思う
- (18) 書簡は資料が寄贈された段階で、前掲註13の坂口英伸と筆者が概数を数えた際には、封筒のみのものも含めて五六〇〇通ほどであった。吉田は書簡の総数を数えていないので「六五〇〇通」と書いているのは(「引退に際して一言」『東京芸術大学美術学部杜の会会報』四三三号 二〇一七年二月 一三頁)、数字の聞き違い、もしくは記憶違いによる誤りである

- (19) 留学中に教授を被命。帰国は一九二七年
- (20) 前掲註7 三五一頁
- (21) 前掲註7 七四頁
- (22) 前掲註7 三二九頁
- (23) 直昭の実家は鎌倉
- (24) 前掲註7 七一頁「其時は常に平子鐸嶺の瘠せた姿と、太った、相撲のやうな新海竹太郎との間に、小柄な先生を見た。先生一人の散歩を見かけた記憶はない」三三〇頁「只夏は鎌倉に避暑され、時々海岸を散歩されてゐるのを見かけた。瘦せた平子鐸嶺と太った新海竹太郎と共に、先生の小柄の軀を見たのが眼に浮ぶ。」
- 法隆寺非再建論者として名が残る仏教美術研究者の平子尚（鐸嶺）については、早世したためかあまり具体的な資料が遺存していないが、以下の著作からある程度知ることができる。平子鐸嶺著 中川忠順、黒板勝美、稲葉君山編『佛教藝術の研究』三星社 一九二三年に掲載された追悼文、平子鐸嶺著・平子恵美編『増訂 佛教藝術の研究』国書刊行会 一九七六年、野田允太『鐸嶺平子尚先生著作年表・略歴』癸丑会 一九七四年。なお、拙稿「関野貞と東京美術学校 (三) 平子鐸嶺」「関野貞アジア踏査」東京大学総合研究博物館 二〇〇五年六月 一三七―一三八頁では、関野貞その他当時の建築史家、美術史家たちとの関係を、拙稿「中国旅行の日記について」「関野貞日記」関野貞研究会編 中央公論美術出版社 二〇〇九年 七七―七七八頁においては、関野貞や塚本靖と共に一九〇六年に中国で調査を行った際のことを述べた
- (25) 二〇一九年五月三一日開催、文化財情報資料部研究会「資料紹介 東京文化財研究所架蔵 平子鐸嶺自筆ノート類について」発表者 津田徹英（青山学院大学）
<https://www.robunken.go.jp/materials/karudo/817156.html>
- (26) 前掲註7 三四四頁―三四五頁 関野貞の講義は、直昭の友達である和辻哲郎も『古寺巡礼』岩波文庫 一九八五年五月 四一頁に「講義の時関野博士はこの像を天平仏と」と述べているように聴講したようだが、和辻にとっては「古美術の研究は自分にはわき道」だったようだ。（『同』二五頁）
- (27) 前掲註7 一二八頁。その他岡倉と中川との思い出に関しては、同著の「岡倉天心回顧」「中川忠順先生追憶」一二五―一四七頁に詳しい
- (28) 前掲註7 三四五頁
- (29) 前掲註7 三四五頁
- (30) 前掲註7 三四五頁 岡倉と中川の関係について明確なことはわからないが、「ある時新海竹太郎さんが私に言ひました。岡倉さんの講義は中川が下しらべをす

る」前掲註7 一三八頁、「此中川さんが、天心先生と直接如何なる関係があつたかは、私は存じませんが、新海さんの話は、ほんたうの話と思はれますから、それだけでも、かなり信頼された間柄であつたことも分りますし、大學の講義も此人に譲り、ボストンの仕事も若干中川先生が継がれていたのですから、お互によく理解して居られたことでせう」『同』一三九頁、「天心と中川との関係は、浅くは無かつたらしく、後任としての推薦も其故であつたらう」『同』三四五頁とある。また、岡倉が亡くなった直後にボストン美術館館長のフェアバンクスから早崎梗吉へ送られた返信に、中川について「岡倉も跡を継ぐことを望んでいたと思う」と書かれている（拙稿「早崎梗吉の活動について」ボストン美術館蔵岡倉覚三蒐集中国彫刻コレクションを中心として」注五六 MUSEUM 六五六号 二〇一五年参照）。以上のようにかなりの信頼関係であつたのではないかと考えられる

- (31) 前掲註7 一四四―一四五頁
- (32) 前掲註7 一四六頁
- (33) 本資料整理中に着手し、翻刻がある程度終わったノートは二冊のみ。田中潤による
- (34) 前掲註7 一二九頁。「恰度その頃、東京大学でも日本美術史といふものが、研究題目として意識にのぼつて来た」「それまでも、工科大学の関野博士が、文科の学生の為に建築史を主とする美術史の講義をして」いたが、「文科の方には専門家は無く、美学の講座に附随して、時々大塚教授が西洋の文芸美術の講義をして」いた
- (35) 拙稿「関野貞と日本美術史」前掲註24「関野貞アジア踏査」東京大学総合研究博物館 二〇〇五年六月 九六―九七頁
- (36) 林みち「1 英文版『国宝』Japanese Temples and Their Treasures, 1910と岡倉寛三」『平成二九年度 筑波大学芸術系研究プロジェクト 新領域創成プロジェクト 報告書 Japanese Temples and Their Treasures 1910 Part 2, Sculpture, painting and Allied Arts-General Outline』文体の考察と試訳 vol.1』筑波大学芸術系 林研究室 二〇一八年三月」林みち「氏によれば、英文と和文による日英博覧会の図録はほぼ同時に出版され、岡倉の英語の講演をウォーナーが速記したものであり、和文は英文よりはかなり簡略な文体になっているところから、中川や平子による翻訳であるかもしれないとのことである
- (37) 林みち「1. 研究の概要と本報告の構成」『平成三〇年度研究報告書 Japanese Temples and Their Treasures, 1910 Part 2. Sculpture, Painting and Allied Arts-General Outline』文体の考察と試訳 vol.2』筑波大学芸術系 林研究室 二〇一八「1. 試訳の完成に寄せて」『令和元年度研究報告書 Japanese Temples and Their Treasures,

1910 "Part 2. Sculpture, Painting and Allied Arts-General Outline" 文体の考察と試訳 vol.3』筑波大学芸術系 林研究室 二〇一九

- (38) 筆者は前掲註35において、和文『国宝帖』の構成全体を岡倉が為したものと考えたが、前掲註36、37の林みちこ氏論文から新たな知見を得、全体を岡倉が構成したものであると再認識した

- (39) 前掲註7 七五頁「生涯の内随分多くの先生から、様々の講義をきいたし、其内二三の先生の夫れは、今尚ほ感謝と感激とを以て想出することが屢々あるが、東京帝國大学に於ける岡倉天心、中川忠順、伯林大学に於けるエトムント・ヒルデブランド大塚先生の場合も其一つであり、其始めでもあつた。今日回想して、夫れがどれだけ私自身の血となり肉となつたかは、明らかに分らないが、ある方向をつけられたことは確かであり、大体に於て其方向に私も進んで来たと思つてゐる。」と述べているように、帝大における大塚、岡倉、中川と共にベルリン大学においてヒルデブランドからも影響を受けている

- (40) 前掲註7 一一―一二頁、六一頁。ここに見える古社寺保存会に関係していた「伯父」とは、九鬼隆一のこと

- (41) 田村寛貞 前掲註7 二六七頁に、帝大のリプス会という美学の研究会のメンバーで、「学習院から来て美学で論文を書いた」とある。田村は、陸軍少将の息子で学習院出身。志賀直哉、有島生馬、柳谷午郎、木下利玄などと共に儉遊会（のちに陸友会となる）に属しており、中学時代にはとても親しかったことが、生井知子「志賀直哉年譜考」（『同志社女子大学 日本語日本文学』1―13 二〇〇六―二〇一八）に見える。なお、生井氏の本稿は二〇二一年現在継続刊行されている。田村は、一高から帝大に進み、音校教授となった。のちに葉書（ケラー書簡2）に見える柳谷午郎は、枢密顧問官柳谷謙太郎の四男。正金銀行に勤め、海外勤務も多かった

- (42) 前掲註7 三四三―三四四頁

- (43) 田代裕一朗 発表「上野直昭資料から発見された高裕變直筆原稿について」二〇二一年一月二七日 於・東京文化財研究所文化財情報資料部

- (44) 前掲註4 九六七―九八四頁参照

- (45) 前掲註44 九七七頁上段

- (46) 本田弘人 文部書記官のちに熊本大学第二代学長 昭和三十四年。永井専門局長とは永井浩のこと参考文献…金子淳『博物館の政治学』青弓社 二〇〇一年

- (47) 前掲註7 三〇九―三一〇頁

- (48) 大塚稔から直昭への和文書簡「書簡1」は、故吉田千鶴子が直昭資料から発見したものであり、前掲註18『杜』四三号 一三頁において、以下のように述べてい

る。「校長就任の経緯については、一抹の不安を抱きながらも評論家横川毅一郎の説を引用した。ところが上野史料中の大塚稔書簡はまさに横山大観の懇請を直昭に伝えたために書いたものであって、横川の説の正しいことを証明しているのである。」

- (49) 矢代幸雄（一八九〇―一九七五）横浜に生まれる。第一高等学校から東京帝國大学英文科、同大大学院修了。大学を首席で卒業後に東京美術学校（一九一五―）、第一高等学校、師範学校で教鞭を執る。美校では、英語、西洋美術史、西洋彫刻史の授業を嘱託。一九一八年に教授となり、一九二一年三月文部省からの命により西洋美術史研究のため満二間、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカで在外研究。一九二五年帰国して復職（東京文化財研究所「物故者記事 東文研アーカイブデータベース」<https://www.robunken.go.jp/materials/bukko>）。同年ロンドンで『サンドロ・ボッチチェリ』を刊行し西欧で高く評価された。留学中の調査の成果の一つであろうか、現地で自身が撮影、もしくは現地美術館博物館より入手したと思われる作品の図版を纏めた写真集である『美術史研究用図譜 東京美術学校教授矢代幸雄撰』第一輯、第二輯が一九二七年六月に大塚巧藝社から青山新編者により刊行されている。

また、「東京美術学校 昭和五年職員関係書類庶務掛」掲載の「出張上申案」によれば（前掲註4 四六八頁参照。職員関係書類は簿冊）、矢代は、一九二一年から同二五年の留学の他に、一九二七年四月から欧米各国に出張した（但し、簿冊には「昭和二年ヨリ翌三年ニ涉リ約一ヶ月間欧米各國ニ出張ヲ命ゼラレ」とあるが、前述の東京文化財研究所の物故者記事によれば、一九二七年三月から一九二八年五月まで欧米に出張した。したがって、「一ヶ月」ではなく「一カ年」の誤りであろう。後掲の資料「和文書簡5 矢代幸雄1」では一九二六年には矢代は東京にいて「あるいは来年春欧州へ一寸行くかも知れない」と述べ、一九二七年の春に欧州へ出張の可能性を述べている。また「同書簡6 矢代幸雄2」では一九二八年三月にウィーンから京城帝大の直昭への手紙で、ベルリンで手紙を受け取ったこと、その手紙への返信をウィーンで書いていることがわかり、欧州諸国を移動していることもわかる。さらに「巴里では黒田清君に逢つて、四月シベリア経由、一しよ（一緒）に帰ろう」とあり、「ベルリン宛に手紙をしたらば、四月初めに通過の際うけられる。用があるなら頼まれる」とあるので、直昭が欧州で矢代に頼みたいことがあれば、シベリア経由で帰国する際にベルリンでその手紙をピックアップできること、そして京城帝大に在る直昭の所に寄るつもりとわかる。（本註釈においては、書簡および本節に関連する事項のみ記載した）

(50) 矢代幸雄『忘れ得ぬ人びと』(矢代幸雄美術論集1) 岩波書店 一九八四年二月

一七九頁

(51) 前掲註50 一八一―一八二頁

(52) “SANDRO BOTTICELLI” by Yukio Yashiro, 1925, The Medici Society, London 本

文二巻図録一巻、一九二五年、ロンドンのメディチ・ソサエティから出版した。四年後に普及版一巻本がメディチ・ソサエティから刊行

(53) 矢代幸雄『日本美術の恩人たち』文藝春秋社 一九六一年、前掲註50『忘れ得ぬ人びと』など多くの随筆から矢代の国際的な交友関係の広さがわかる

(54) 〔18〕シュプランガー来校」前掲註4 七六七頁

(おおにしじゅんこ・元東京藝術大学美術学部非常勤講師)

資料1 和文書簡

凡例

漢字は常用漢字に統一した

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた

書簡本文中の()は原文の通り

□不明文字

〔 〕内は筆者による注、補遺、不明文字の候補

書簡1 大塚稔(大塚巧藝社創業者) 封書

一九〔一八〕年一〇月五日(一〇月六日の消印)

封筒表 大阪市天王寺町 大阪市美術館長 上野直昭様 シンテン

封筒裏 一〇月五日 東京都京橋□ 大塚稔

日頃の御無沙汰を御ゆるし下さい

今日横山先生から美術学校の校長を誰が、適人〔任〕だろうと相談を受けましたので先生を推薦致しました

国家非常時ですし

若しお願に□〔伺〕ましたらいやでも引受けて下さい

今日の場合先生以外に東京美術学校の校長はありません

大観がコモン〔顧問〕になります

先生熟考をお願いします

此手紙焼捨て下さい

大塚稔

先生侍史

註 一九〔一八〕というのは、昭和一九または一八年を示す。したがって、西暦では一九四四年または一九四三年のこと

書簡2 本田弘人1 封筒「消印亡失」 速達

封筒表 大阪市天王寺公園大阪美術館長 上野直昭様 「文部省の封筒使用」

封筒裏 東京麹町霞ヶ関文部省□□局 「自筆で」 □「四カ」月二一日

前省

御手紙拝見致しました 早速永井専門局長に連絡し又別の機会に大臣ともお会いして予定方針通りすすめつつある次第です

つきましては永井局長も様々具体的に話をすすめるにつき是非御上京御打合せしたいとの事で左様御伝えをたのまれました

横山大観さんからお会いしたい趣です

とも角御上京□□御相談又御指□「標」をお願いします とり急ぎ先は書面のみ

勿々□□

□「四カ」月二一日

本田弘人

上野直昭様

書簡3 本田弘人2 封書

封筒表 朝鮮京城府 京城帝国大学法文学部教授 上野直昭様 親展 消印一五

一一二七（昭和五年／一九四〇一月二七日）

封筒裏 東京市小石川区高田老松町二 本田弘人 消印 一五 一〇 二九（昭和

一五年一〇月二九日）「学術研究会議の用箋使用」

拝啓

深秋の候□□御健勝の□御よろこび申しあげます

先般大阪市の件に関し ただ失礼な事を申し上げ 御機嫌を害った様な気がして恐縮に存じています 早速御手紙を差しあげたいとは思いましたが右の次第で何となく気が重く且つ大阪とも連絡の必要を感じてつい後れました 前□私の不行届と懈怠とから行き違いや遅延を来して□□なり次第です

大阪市長も特に親書を以て私まで早急解決実現方を懇請せられまた前教育部長若□

「路？」もつい先日上京して経過を心配して居られました

大阪では直接の交渉は失礼だとの感じから私に依頼している様です

どうか速に御快意のほどお願いします 何かの点に御不満がありますれば私からでも然るべく取りつぎ交渉致します 旅費云々の事は一応展覧会費の中に含めてあるとの事でした

とり急ぎ意を尽くしませんが先は右まで 忽々□□

一〇月二七日

本田弘人拝

上野直昭様侍史

書簡4 本田弘人3 封筒「消印 一九 三 一七」

封筒表 大阪市天王寺公園大阪美術館長 上野直昭様

封筒裏 東京小石川高田老松町二 本田弘人

急啓

先日は突然電話にて失礼しました 御親書拝見早速専門局長とも連絡し一昨日大磯に私自身安田鞆彦氏を訪問、種々懇談致しました 御存知の通り中々慎重で大観先生の意見をそのまま（洋画の人達その他に）徹底させる事にいささか危惧の感じをもち大観先生に会われる前に小林古径氏と一緒に懇談したいとの事で結局出馬の快意も充分看取出来ました 安井梅原両氏は先ず安田小林氏を固めてからと思つてまだ会いません いずれにせよ御出席をお願いします

私は急用で今夜金沢の地方協議会に出席の為め出張 二十日中に帰京の予定です 二十日過ぎ廿一日か廿二日御上京をお願いします 委細御面談の上

先は寸暇をぬすんでとり急ぎ要用のみ 忽々□□

三月一六日

本田弘人

上野直昭様

書簡5 矢代幸雄1

封筒表 ベルリンの独乙「独逸」大使館気付 「via Siberia」 消印 下谷 一五

六 五（一九二六年六月五日）

本文

大森木原山一五七〇

矢代幸雄

上野兄

フィレンツェその他よりの葉書ありがとう。夏はドイツに居るのですか。

いつか君に頼んだ（東京女子大に居た）小塚しげ子の兄小塚新一郎を独乙（独逸）へやることになった。独乙（独逸）へ入りたて誰をあてにさせてよいかわからないので、すまないが君の所へ送ることにした。若し伯林に君が居るのなら何処かの宿に放り込んでやってくれ給え。独乙（独逸）語はこちらで少しやらせておいたがとても駄目だと思う。

僕等に関すること新一郎からきいてくれ給え。文子と結婚はしたが文子が弱いので新婚生活の一ケ年に半分位実家に帰って居た。悲惨なことだ。

君があまり勉強してからだを弱くしたようにもきいたが、本当か。本当でないことを祈る。

東京に落付いて約一ケ年半、当座は忙しいのでまぎれて居たが此頃□々淋しくなってきた。君が東京に居ればいいと毎日思うようになった。君に電話をかけたり、叱られたりしたくなった。目下は器械的（機械的）に美校の講義に出るばかり。

「受胎告知」の研究、今度は少し君にはめられたようだね。叱られつづけて悲観した所なので、ほめてくれたというほどでもない君の言葉を嬉しく記憶したりして居る。

とうとう美校へ田中豊蔵君⁽¹⁾に来てもらうことにした。演目は西域美術史と新発的のやつだ。それで田中君に如何□□に□「命」えるのか唯一の慰安でも願いでもある。

美校に特殊研究講義⁽²⁾というのを置いて松岡映丘氏が古絵巻物の研究というのをやって居る。君が東京に居たら興味を持つてくれそうな事だね。君の研究は如何だったの、

あるいは来年春欧州へ一寸行くかも知れない、

そうして逢えたらうれしいね。

東京が淋しくなる時君が朝鮮から帰む（？）でくれまいかと思うこともある。東京を去りかねながら美校はつくづくいやだと思ふ日が多い。

奥様によろしく、ああ君等に逢わないのも久しくなるね。僕の出発前に君等を写

した写真がまだあるよ。

註

(1) 田中豊蔵 一九〇五年、京都の第三高等学校から帝大入学（中国文学）、一九〇八年卒業。一九二六年四月三〇日美校において講師として「中央アジア美術史」担当。一九二七年在外研究員としてインド、欧米に留学、翌年帰朝後に京城帝大教授となり、一九四二年退官。戦後、美術研究所所長と東京都美術館長を兼務したが一九四八年肺炎のため逝去

(2) 本文註4 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第三卷 三一〇—三一頁参照。東京美術学校は一九二六年五月から学外に対して公開講座「美術に関する特殊研究講義」を開設した。「これは一般から聴講者を募集して毎週土曜日の午前に一講座、午後に一講座を開き、本校教員その他が専門的講義（無料）を行うもの」であった。矢代幸雄は第一回公開講座の同年五月一日から「欧米博物館事情と博物館理想」と題する講義を行ったが、田中豊蔵は第二回同年九月二五日から一〇月三日まで「藤原時代の仏画」を担当した

書簡6 矢代幸雄2

封書 ウィーンの矢代から京城帝大の直昭へ 消印 11-18. MÄRZ 1928（一九二八年三月）

本文

行外 此間 Naumburg へ行って古ドイツの石彫にほれた。Bamberg は未だ知らぬ

先日 Meing □□...□に逢った時 Bamberg に行け行けとし切りに言つて居た。

上野君

今度はウィーンから書く。今度は日付も忘れぬように入れておく。今日は一月一八日一昨日当地に来た。君の手紙が伯林に着いた頃丁度僕は偶然に伯林に来たことになる。ありがとう。久しぶりに旧音に接してうれしかった。ゴルトシュミットと書いたは勿論、ヒルデブラントの間違い。あの当時、受胎告知の研究の継続からゴルトシュミット氏の Elfenbeinskulpturen に□□にお世話になって居たので、ついその名が出たのだろう。それでヒルデブラントのレオナルドは見たかい？僕は買っ

て見たが、挿絵の容子と少し初めを読んだ工合い〔具合〕では、余り関〔感〕心し
そうにないと、僕は思う。僕は何でもない書き方の Friedländer なんかの方がむし
る賛成するよ。彼の Dürer を最近読んで見たが Kerner の著書だね。よい意味の。
レオナルドの研究は相変わらず気にかけて居るが、此の前の手紙に書いたウイン
ザーの研究を本当にやるとすると、一九三〇年、また英国に來なければならなくな
る。母をあれほど老いさせて、また出て来るのは如何にも辛いから、ウインザー研
究出版の契約はしないかも知れぬ。ああ母が気がかりで困るよ。西洋美術史を研究
する者は、研究と家族の事情とが二途になる。オックスフォードのレオナルドは、
Ashmolean のほかは、Christ Church に少しある。非常によいものと attributions と
がある。レオナルド探求も仲々面□だ。僕は近日中に一寸ポーランド Krakaw へ
行って来ずばなるまい。例のボーデの本物とする女の肖像、ワイマールの
Abendmal〔最後の晩餐〕の模写、感じではルイニの模写らしく見える。如何。尤
も僕はまだルイニには詳しくないのだがね。ハンブルグには未だ行かない。大した
ものがない。断片の素描レオナルドがあるね。帰途一寸よる〔寄る〕つもり、あそ
こには例のボッティチェリ研究の Dr. Warburg が大学の教授して居るので逢いた
いと思つて居る。彼も僕のことを引合に出すならん。

ボッティチェリの本は、忘れやしいが、僕は第一版は本文は余りに気に入らぬ
ところが多いから、第二版を目下用意中故第二版を贈ろうと思つて居る。それ等帰
りに京城でお厄介になる時話す。小塚新一郎には逢わぬ。ベルリンに居ないらし
い。何処に居るか行き方が知れぬ。彼も最早小供ではなし、しっかりやつて居るの
だろう。——と祈るばかりだ。今は。

帰朝後の仕事のこと色々考える。君に話した研究所の仕事に忙殺されるだろう。僕
は岩波の西洋美術史の講話の古代篇は今あのまま放つておいて、中世篇を書こう
かと思う。尤も中々計画沢山で何が出来るか。東京に□つていて居るといかな。

昨夜当地で Furtwängler 指揮の Messiah (Händel) をきく。今度の日曜には
Schubert Zennarfest がある。(6) けれども僕がきいた一番いいオーケストラは Leipzig
Gewandhaus のやつで、あそこは蓋し音楽の聖堂だね。ウインではききたいききた
いと思つて來た Mozart が何もきけそうにない。僕の性に一番合うものは彼らしい。

巴里では黒田清君(10)に逢つて、四月初めに通過の際うけられる。用があるなら頼まれる
相談がある。在るは〔あるいは〕そうなるかも知れぬ。巴里ではよく一しよ〔一緒〕
に音楽会へいった。黒田君はよくやつて居るね。感心したよ。
今日京城大の考古学教授藤田氏〔藤田亮策〕に遇〔偶〕然逢う。
サヨナラ、もうやめる。帰つたら今度こそ君に余りしかられないように勉強しよ
う。君に会うのがたのしみだ。田中蒼海子〔田中豊蔵〕、今イタリアかしら。今イ
タリアは日本美術史の關係の大家で一ぱい〔一杯〕らしい

(幸)

(ベルリン宛に手紙をしたれば、四月初めに通過の際うけられる。用があるなら頼まれる)

註

- (1) Max Jacob Friedländer 1867-1958 か？ ネーデルランド美術研究 一九二三年に
A. Dürer を著してゐる
- (2) デューラー
- (3) 鑑識家の意
- (4) オックスフォード大学の大学博物館 Ashmolean Museum of Art and Archeology の
こと
- (5) Wilhelm von Bode レオナルドに関する著作あり
- (6) ポーランドのクラクフ美術館にはレオナルド作「白貂を抱く貴婦人」があるので、
これを差すか？
- (7) ベルナルディーノ・ルイーニカ イタリアの画家。レオナルドの影響を受けてい
る
- (8) 一九二七年より美術研究所の設立に参画。同年三月より欧米に出張。翌一九二八
年五月帰国。設立にあたって、作品写真資料を主とした東洋美術研究のための基礎
的な施設を提案、実行したとされる(以上「物故者記事 東文研アーカイヴデータ
ベース」<https://www.robunken.go.jp/materials/bukko>より)が、その仕事を指すと
思われる
- (9) 一九二八年はシューベルトの没後百年の年 三月二六日 ウィーンの楽友協会で
「フランツ・シューベルト記念コンサート」が開演されている(大河内文恵の教示
による)
- (10) 黒田清(一八九三—一九五二) 日本の華族。貴族院議員、財団法人国際文化振興

会専務理事。爵位は伯爵。東京府出身。清は黒木為楨陸軍大将伯爵の三男。黒田清仲伯爵（内閣総理大臣黒田清隆陸軍中将伯爵の子）に子が無かった為、養子となり爵位を継いだ。一九一九年、東京帝国大学法科大学を卒業し、同文科大学修了。一九二四年、フランスに音楽研究のため留学した。一九三四年、国際文化振興会常務理事となり、さらに専務理事となる。一九四四年一月、貴族院伯爵議員に就任、研究会に属し華族制度廃止までその職に在った

書簡7 小塚新一郎1 矢代幸雄1に同封 小塚新一郎から上野直昭へ

突然に手紙にて失礼致します

実は今度急に独乙〔独逸〕留学を思い立ちまして、六月二十一日発の熱田丸で出発致し度いと思つて居りますが、未だ独乙語も極めて不十分ですし、外国の事情にも通ぜず、その上独りで出掛けますこと、少し無暴〔無謀〕な様にも思い、又、細かい気も致しましたが、頂度先生が伯林に御居でなのを知り、矢代さんに先生を御紹介下さる様、御願いました。御忙しい中を大変御迷惑とは存じますが、伯林着の当座暫く御厄介を願いたいと思つて居ります。

独乙〔独逸〕へ参入つてから何を為るか、未だ、詳しく定めては居りませんが、主として哲学に関したるもの、或は美学でもやろうかと思つて居ります。しかし、兎に角独乙〔独逸〕語が先決問題ですから、先ず語学を一生懸命で、やる考えで居ります。詳しくは、御目に掛りましてから、御話を致したいと思いますが、何卒宜敷く御願ひ申します。

マルセーユは、八月二日着の予定ですから、伯林には、遅くも八月十日頃迄には到着致しますと思います。伯林には半年乃至一年位居りまして、それからハイデルベルクあたりへ参入りたいと思つて居ります。

御迷惑とは思いますが、右、重ねて御願ひ申し上げます。

六月三日

小塚新一郎

上野直昭様

書簡8 小塚新一郎2

東京芸術大学美術学部所蔵上野直昭資料について

封筒表 京城府東崇町一九八 大学官舎 上野直昭先生 消印〔一四、一〇?〕昭和一四年カ?

封筒裏 一〇月七日 東京市大森区馬込町東二ノ九八二 小塚新一郎 拝啓

先頃は御手紙を有り難うございました。箱根の写真を拝見致しまして、愉快だった夏休みを思い出して居ります。今から来年の夏が待ち兼ねる位です。

逸治よりは先生の御手紙を戴いた前日に電報で「承知」の旨申してまいりました。航空便は四、五十日かかった様子です。然し矢代さんが旅行その他で家に居らず、二、三日前やつと会うことが出来たような次第で、御返事も遅れてしまいました。尤も九月二十四日の日曜には御両親の法事で私もまいったのですが、お寺で多勢来客がありましたため話が出来ませんでした。

矢代氏は美術研究のためには、東京の如き土地に居て生きた美術の空気を吸う必要があり、児島先生も慶應の講義を譲ると云つて居られるし、東京に居た方がよろうと申されます。然し慶應の講義は二時間だそうですし、他は研究所に行くとしても、果たして研究所が落ち付いて勉強出来る処かどうか少々疑問に思つて居ります。経済的に見ましても、一人の生活は十分出来るとしても、結婚の問題も出て来ましようし、経済的にある程度安定がなくては、生活も勉強も落着いて出来難いのではないかと心配致して居ります。が 何れにしましても、いろいろ問題が複雑となりまして、本人の留守に私共だけでは解決出来なく為りましたので、もう間のなく帰りますことでもあり、本人の意向を聞き、又先生にご相談して定めたいと存じて居ります私は御迷惑でも先生に最後の決定をして戴きたく思つて居ります。戦争のためフランス船に乗れないと思いますが、十月下旬には何とかして帰朝致すと思います。フランスからはその旨申してまいりましたが、最近にはアフガニスタンに這入る前に国境のペシャワールからの手紙がまいりました。交通不便のためアフガニスタンよりの消息は未だございません。

まり子〔マリ子〕さんの御話、私共のようなものには、大した御役には立ちませんが、出来るだけの努力は致します。私共は、御世辞なしに、非常にいい近頃珍しい御嬢さんと思つて居りますので、出来るだけのことはさせて戴きたいと考えて居

ります。まり子さんのことを書く、書くことが多すぎますので、ここでは「申し分のない方」と私共は思つて居りますことだけを率直に申し上げることに致します。近日中に御帰京の由、楽しみに致して居ります。

その節、又ゆつくり御話し申上げたく存じます。なお逸治よりの電報のことは、状態も変つて居りましたので矢代さんには話さず、本人が帰つてから、よく相談の上、大体本人の意向によつて定めたいと思う、とだけ申して置きました。では何れ又、とし子よりも宜しく申して居りました。

敬具

一〇月七日

小塚新一郎

上野先生

註

(1) 児島先生とは児島喜久雄のこと 一九二五年京城帝国大学法文学部西洋美術史講師を嘱託され一九二六年美術振興会調査会委員

資料2 ケラー (Adolf Keller) 書簡

・封書四通、葉書四葉のうち封書三通、葉書三葉を翻訳

・独語翻訳…大河内文恵(東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校非常勤講師 音楽学博士)

・訳文中の□は不明文字。訳文中の「」、() は原文、「」内は翻訳者による補遺および註。

・「」内は大西による註その他。文面の体裁、文章の省略については大西による(内容が些末な部分は省略した)。

・ケラーについては、本文七―九頁および本文註7『邂逅』三四三―三四四頁参照。

1 封書 一九一二年九月二日

魏町 一九一二年九月二日

上野さん！

「もし旅に出た人がいるとして、彼はなにも説明できないだろう」^(訳註1)

さて、聞いてもらえますか？「あなたと」別れてから、私はひとりぼっちで二等車に、それは私にとっては三等車も同然でした。というのも、二等車の中は非常に暑く、京都に着いたらすぐ「西瓜！西瓜！」と叫んでしまったくらいです。それから路面電車に乗り、途中、私の心の中に大きな衝動が沸き起りました。

反対の人たちは「かぎや」^(訳註2)へ行つてお菓子を食べたり、コーヒーを飲んだりしました。

「中略」私たちは急いでもう一杯コーヒー(ドイツの□)を「かぎや」で飲み、それから駅へと急ぎました。さよなら京都！さようなら！

さて、学校が再び始まり、単調な日々がいつもの歩みで進んでいきます。幸いなことに、過去の詩情がほのかに光るベールの助けになります。我々がみた美しいものの思い出は私にとっては暗い夜空のなかで輝く星となつていたといった具合に。神戸ではいかがお過ごしですか？今、夜はまたよく眠れていますか？田村さんがあなたによろしくといっています。残念ながら彼はいま箱根にいて、そこで私を待っています(が、そこに行くにはもう遅すぎます)。彼はあまり太らずにいて、彼の食欲

はまだ十分ではありません。根本的なあるいは主要な要因は、まちがいなく神経過敏なところにあつて、それは働きすぎによるものです。〔中略〕次はいつ、私たちは一緒におしゃべりできるでしょう？残念ながら、いま東京は葬儀のため、音楽がまったくありません。まるで人里離れたところにいるようです。内親王のかたがたは赤城山に登らなければならず、なかしま嬢はとてもほっそりとか細くなつてしまった。イカガデゴザイマシ「タ」カ？

また羨むべき手紙が届いたでしょう？ 草々 A.ケラー

〔訳註1〕 ドイツの詩人 Matthias Claudius の Wenn jemand eine Reise tut という詩の冒頭

二行をもじつたものと思われる

〔訳註2〕 百万遍の「かぎや」のことカ

〔訳註3〕 七月三〇日明治天皇崩御のための喪中という意味カ

2 葉書 一九一五年三月二十九日

表書き 音楽学校田村寛貞気付 上海にて 三月廿九日 月の夜

〔訳註1〕

〔文面は柳谷午郎（英語）とケラー（独語）による。柳谷の英文書簡の翻訳は大西による〕

〔英語〕

親愛なる上野さん、

あなた達からの紹介のカードを見ました。そして〔私は〕ケラー氏と会えてとても

〔訳註2〕

嬉しいのです。彼のために私にできることは何でもします。私はあなたと田村さんに

〔訳註3〕

ケラー氏が無事にここに到着したと伝えられて大変に幸せです。彼はこれから短期の新生活に入ります。 あなたにすぐに会えますように。あなたの親愛なる、G. 柳谷

〔訳註1〕 葉書表書きは日本語

〔訳註2〕 下記のケラーからの文面からこの「あなた達」というのは、直昭と田村、村上という人物。おそらく名刺に紹介を書いたものではないかと思われる。

〔訳註3〕 田村寛貞と柳谷午郎については、本稿本文「五 アドルフ・ケラーとの日本

東京芸術大学美術学部所蔵上野直昭資料について

上海 一九一五年三月二十九日〔独語〕

親愛なる上野様

あなたのあたたかいご推挙により、柳谷さんと村上さんから心のこもったカードをこちらで受け取り、Boone Roadの日本人倶楽部のそばにささやかな日本式の宿を見つけました。ですが、ここではすべてが私にとってよそよそしいままで、東京で私のそばにいてくれたしつかりとまるで警察のように監視してくれていた人もおらずとても心細く感じています。でもご心配なきよう。我々の共通の知人にあなたからもよろしくお伝えください。 A ケラー

〔訳註〕 polisch という単語は存在しないが、おそらく上野のことを警察に喩えて茶目づけたつぷりにこのように言っているものと思われる。

3 葉書 一九一五年五月一七日 ドイツ薬学および工学校 ペール・ロベルト

通り四〇 上海

上野さん！

あなたは心理学者だから、おそらく私の居心地の悪い状況に共感してもらえでしょう。上海はまったく好きになれず、筋肉リユーマチのせいで病気になるてしまったし、この気候は酷いです。東京のあなたはいかがですか？京都や奈良に旅行に行きましたか？いま私はこの学校で教師をしており、かなり多忙です。草々

➤ケラー

4 葉書 一九一六年九月三日 上海 ルイ・アルベール通り四〇

親愛なる上野氏！

数日前、あなた宛てにヴントの本を送りました。これはあなたに対する、つまり、たとえこの戦時のせいであなただに手紙を送ろうと思えなくなったとしても、私はあなたと田村さんのことをいつも考えているというしるしのつもりです。あなたの

「花と繁栄」を願って

あなたより年長の「書生」であり「先生」である「A」ケラーより

(訳註) 第一次世界大戦(一九一四—一九一八)

5 封書 封筒なし

シュヴァーベン地方、ゲミュント、一九二四年六月一四日

親愛なる上野氏！

やあ、長いこと手紙を書いていなかったが、その原因は何でしょう？

(一) まず、私はあなたの注文に対するアウペール氏によるつまらない説明に怒っています。

私は、あなたなら欠落したノートを確認に入手できると本当に確信しています。が、彼自身、出版社とトラブルになっており、出版社と直接やりとりできなくなっています。そこで私はあなたに、要求された価格が低いため、彼が欠落したノートをあなたに提供するまで、様子を見て、彼にまだお金を送らないよう忠告します。そうすれば彼ももっと努力してくれるでしょう。私は六つの小冊子を入手しました。「内容は」ヒルデブラントによって仮綴された絵画、彫刻など一八世紀のもので。これらは欲しいですか？もしあなたが全部の作品をすぐに必要としているなら、あなたにノートを返します。もちろん彼は送料なしであなたに欠落したノートを、あなたが望むところなら日本でも韓国でも送ります。

(二) 私は自分の下手な写真技術を恥ずかしく思っています。どれも光と影のコントラストのない灰色の写真になっているのが残念です。これで、シカタガナイ。やはりそれは愛すべき思い出です。[中略]

クライン教授は来週、学生たちとバンベルグに行きます。ニュルンベルクで、今回、私にとって新しい発見がありました。それは古い「聖」ヤコブ教会で、そこには良い彫刻と非常に美しいステンドグラスがあります。水戸「？」のグエンデルト教

授が手紙で、^(訳註)ライス大学の加藤教授(しんとう)が私に質問があると言ってきました。

ですが、私は彼に心当たりがありません。グエンデルト教授は最近成田を訪れました。あなたのホームシックはひどくなっていますか？ 七月の二八日から二六日、少くともあと二ヶ月でゲミュントを去るのを私は楽しみにしています。ヘッセルはコブレンツに私を招待していません。しかし、私はこの夏ほとんどシュトゥットガルトの州立図書館で仕事することになります。

さてもうおしゃべりは充分でしょう。

草々「A」ケラー

(訳註) Rasと書いてあるがRiceの誤りと思われる。

6 封書 一九五四 ^(訳註)ボズナーより

チューリヒ、一九五四年二月一五日

親愛なる教授氏！

この部門の伝達人であるルツェルンのフィリップ・ケラー氏は我が家族の友人です。もし、彼があなたに会って、我々があなたによろしくと言っていたと伝えてくれたら、非常に嬉しいです。私もこのよい機会にあなたの成果について聞けるよう望んでいます。あなたはまたもう一度スイスに来ることはできますか？あなたの東京での要職を不在にしても許される範囲内での話ですが。 L. Siegf. ボズナー

(訳註) ボズナーについては未詳。

※この手紙には、「フィリップ・ケラー ルツェルン近郊のクレーマーシュタイン」と書かれた名刺が同封されていた。